

# 灌頂卷の佛敎史的性格

福 井 康 順

一

「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。」とは、平家物語の劈頭に見える有名な表現であるが、全篇末の灌頂卷に至ると、それは、平家一門の滅亡の後に建禮門院が大原寂光院に念佛しつつ臨終し、お附の女房たちも、その後「龍女が正覺の跡をおひ、草提希夫人の如に、皆往生の素懷を遂げるとぞ聞えし。」で終つてゐる。

すなわち「平家」は、戦記文學であると同時に一面においては説敎の唱導文學なのである。かくて、この「平家」の佛敎思想に對して研究を試み、管見を發表して來たことは久しい。五年前の「平家物語の佛敎史的性格」がそれであり、その後につづく幾篇かがそれであり、詳しくは最近の「文學」（八月號）の拙稿を検討されたいが、小論は、それ等につながる一つなのである。

灌頂卷の佛敎史的性格（福 井）

二

灌頂卷は、「平家」全篇の末尾に附いている。いうまでもなくそれは「平家」の全部を通じての結びであり精粹である、といわれている。そこには本文の内容が再びくり返されるところがある、ということなどからすると、結局、「平家」全體の構想のいわば縮圖をば示唆しているものであろう、と見られる。

ところで、平家物語の佛敎思想を考える時、そこには法然上人源空の敎法すなわち法然、義の影響が見出される、ということとは、先年來、拙稿において頻りに力説したところであつて、當面の灌頂卷においてもそのことは著しく見出されるのである。

その第一は、長樂寺の阿證房上人印誓（女院出家）である。「印誓」は、「平家」の異本である延慶本や源平盛衰記には「印西」となつてゐるが、印西の方が正しいようで、文治二

年（一一八六）のかの有名な大原談義に同席している。因みにいう。普通、彼は法然の弟子の如くに見られていたようであるが、當時、同席の顯眞や明遍などと比肩しているところから推すと、師弟の關係よりもむしろ法友であらう。

なお、吉記の文治元年五月一日の條によると、女院の戒師は、「大原の本成房」湛敷になつてゐる。それが、今や印誓となつてゐる理由には、三長記の「御戒、自今日、印西上人參仕、」とあることにヒントがあるのであり、また、灌頂卷に緣故が深い建禮門院右京大夫集に見える「あせう（阿證）上人」との因縁によるものであらう。

問題の第二は、「左に普賢の畫像、右には善導和尚並に先帝の御影」（大原御幸）がまつられてゐることである。長門本の「平家」には、行文に多少の違いがあるが、特に問題の中心は、ここに「善導和尚」の出ていることである。ただし、法然が「偏依善導」と稱してゐることは今更いまでもない信仰であつて、彼自身もまた現に「善導の化身」である、ともされてゐる。但しこの場合、灌頂卷の法然義的である、ということ、單に「善導和尚」への關心がそこに見出されるからである、というのではない。普通の佛教思想の上からいうと、「左には普賢（菩薩）の畫像」があるならば、「右には文殊（菩薩）の畫像」があるのが順當である、というべく、それを今や「善導和尚」の御影が並んでゐるところに問題があ

るわけで、やがてその法然義に立つてゐる、という意義を示唆してゐる、と解されるのである。論者によつては、この問題を輕視してゐるが、他に類似した例證が見出せない限りは、この場合、何が故にここに「善導和尚の御影」はあるのであるか、という疑問はかくして説明がつく、といえよう。

問題の第三は、善導の著書の全部である「九帖の御書」が見えてゐることである。すなわち觀無量壽經疏一部四卷を本疏と稱し、それに法事讚や般舟讚などの四部五卷の具疏によつて、本具兩疏九帖が善導教學の全體なのであるが、この九帖が出てゐることは、要するに灌頂卷の法然義的性格を明らかに示唆してゐる。

第四は、上記の「九帖の御書」が「八軸の妙文」と並んでゐることである。すなわちそこには釋迦と彌陀との二尊一致の信仰が見出されるわけであるが、想うに、この思想は、天台宗のいわゆる圓淨一致に一見似てゐるようであつてもそれと實は同一でないことは、そこに善導への信仰が上記の如くに見出される事實である。そこで、翻つて釋迦と彌陀と善導とを禮拜する、という佛教思想を考へるといふと、それは實に法然義、特にはその西山義にほかならないことを知るのである。すなわち法然の高足である善惠房證空の教法がそれであつて、先年發見の山崎念佛寺の阿彌陀佛の胎内經典はその性格を端的に説明してゐる。

最後に附け加えたい問題は、今の灌頂卷の書かれた時期である。そして、それを推定せしめるものは、上文で注目して来たところの「九帖の御書」である。すなわち法然の當時、それは般舟讚を除いて「善導和尚勸化の八帖の御書」とも呼ばれていたのであり、その八卷が、般舟讚の加わることによつて九卷となつた時期は、實に上來、問題にした西山義の開祖證空が仁和寺の經藏から見つけ出した建保五年（一二二七）なのであつて、それは法然の滅後五年に當るわけである。そして、その開版は更に後れて貞永元年（一二三三）、法然の門流である入眞なるものによつて行われている、と知られている。すなわち灌頂卷の書かれている時期は、貞永元年以前には遡り得ないことが推定されるのである。

要するに、灌頂卷の「八軸の妙文」と「九帖の御書」という配列は、西山義に立つてはいるが、大きいといえばそのやはり法然義であることは明らかであり、且つは「九帖」をいうところに灌頂卷の書かれているその時期の上限をば表わしている、といえよう。

なお、西山の三鈔寺と善峰寺とは、人も知るようにどちらも證空とは縁故が深いのである。他方、少納言入道信西の子の是憲は、この善峰寺に住んでいたことが知られており、法

然の弟子である遊蓮房圓照がその人である、といわれている。一方、今の「平家」は、管見によれば、信西一門の手による加筆の様子が見えるのである。すなわち彼此あい照らして考えるというと、灌頂卷の作者は、やはり法然門の内に見出し得るのではなからうか。更にいう。灌頂卷という名稱の意義と由來とに至つては、他日、別に小論を發表したい、と思うが、管見によれば、ここにいわゆる灌頂とは、通説にいわゆる平曲の奥義を意味している、とは考えがたいようであり、また傳法灌頂の意味ではなくて、たかだか授職灌頂であり、また、そこには上記の圓照と共に高野の明遍の存在が著しく眼につくようである。

〔本稿は、干瀉龍祥博士の古稀記念論文集（未刊）に寄せた管見の要旨である。上記「文學」（八月號）の小論と及び結城令聞博士の頌壽記念論文集（未刊）への拙稿と共に、別に高判をまつものである。〕

1 「文學」（岩波書店刊）。副題に「行長説の再検討」によつて、主として年來の卑見に對する異議への反駁であるが、そこには年來の拙論とそれに關連のある小考とを列擧しておいた。なお、本稿のテキストは岩波文庫本平家物語である。

2 平家物語には、周知の如くに、大別すると、この灌頂卷の附いていないものと附いているものと二種がある。八坂流と一方流の二大系統がそれである。當面の問題はすなわち一方流の上に係るのであるが、テキストは上記の如くに岩波文庫本であ

灌頂卷の佛教史的性格（福井）

る。

- 3 拙著、東洋思想史研究及び註（1）所引の拙論など。
- 4 拙稿、「平家物語の佛教史的研究」にやや詳しく言及しておいた。元來、幾つかある法然傳は、彼の師友までをも、一見門人の如くに傳えている場合が多いようである。
- 5 廣小路 亨氏、「山崎念佛寺阿彌陀像の胎内經典等に就て」（『日本佛教史學』二）。「文學」（八月號）の拙稿の註（19）も参照。
- 6 親鸞聖人全集、加點篇（3）・（4）解説、pp. 231—244。
- 7 四十八卷傳卷四四（傳全、p. 283）。そして、翼贊（淨全、p. 533）によつて彼と信西一門との關係は容易に知られる。上記の「文學」の小論参照。
- 8 拙稿、「平家物語の佛教史的解釋」（結城令聞博士頌壽記念論文集）に詳論。
- 9 この問題については、從來、橋本進吉博士の「平家物語灌頂卷と奥義抄灌頂卷」（昭和一五・一〇、「國語と國文學」）が重視されている。もつとも傾聴すべきものであるが、なお論議の餘地はあるようで、他日別に考えたい。

（昭和三八・六・一五）

執筆者紹介（三）

- 近藤 良一（北海道大學大學院）  
 河野 憲善（島根大學助教）  
 大橋 俊雄（大正大學卒）  
 佐々木 徹眞（京都女子大學教授）  
 石田 充之（龍谷大學教授 文博）  
 武石 彰夫（大東文化大學講師）  
 鑑本 光信（瑞應寺僧堂講師）  
 上田 本昌（身延山短期大學助教）  
 田中 良昭（駒澤大學講師）  
 角田 春雄（總持寺副監院）  
 藤田 清（四天王寺學園女子短期大學教授）  
 渡邊 榎雄（日本大學教授 文博）  
 棚瀬 襄爾（京都大學助教 文博）  
 中村 元（東京大學教授 文博）  
 末綱 恕一（統計数理研究所長 理博）  
 古田 紹欽（北海道大學・日本大學教授 文博）  
 増永 靈鳳（駒澤大學教授 文博）  
 上田 義文（名古屋大學教授 文博）  
 菱田 邦男（名古屋大學大學院）  
 小島 文保（龍谷大學講師）  
 原 實（東京大學講師）  
 西村 惠信（花園大學助手）  
 J. W. de Jong（ライデン大學教授 文博）  
 Paul Mus（コレージュ・フランス・エール大學教授 文博）